ハワイ日系人のアイデンティティーとコミュニケーション

足立聿宏（関西外国語大学）

Ⅰ．はじめに

ハワイの非白人住民が話す英語方言は、大別して以下のような段階で標準英語に近づいて来た、と言われている。① Extremely broken makeshift English → ② Broken but fairly adequate with marked foreign elements→ ③ Inadequate substandard dialectual English → ④ Fluent substandard dialectual English → ⑤ Districtly dialectual but more nearly acceptable English → ⑥ Standard American English, with local points of divergence. ハワイでは通称①～④を"Pidgin"と呼び、⑤～⑥を"good English"と呼ぶ。移民とその子孫達の言語は、このスケールの上を左から右へとスムーズに進んだのであろうか。

本論文の目的は、通常ピジンと呼ばれるHawaiian Creole Englishを第一言語とする日系人二世を中心に、日系人の内集団、そして外集団メンバーに対するアイデンティティーとコミュニケーションの変化を歴史的に分析することである。尚、前述の様に、ハワイでは一世が話すピジン英語も二世以降の世代が話すクレオール英語もまとめて「ピジン」と呼ぶ習慣があるが、本論文では明記する必要がある時を除いて、二世の言語をも便宜上「ピジン英語」と呼ぶことにする。

Ⅱ．戦前の日系人と英語コミュニケーション

1835年に始まったハワイの製糖産業は、その後の急速な発展に伴って多くの労働力を必要とし、中国、日本、ポルトガル、フィリッピン、ノルウェー、ドイツ、朝鮮、プエルトリコ、スペイン、ロシア等から多くの労働者を導入した。

日本人移民は1865年にハワイへ渡った、150人程の所謂「元年者」を最初とするが、実際に移民として実績をあげたのは1885年に始まる官約移民からで、この年から1924年の排日移民法で日本人の渡航が禁止されるまで、218,418人の日本人がハワイに渡った。当時、ハワイは独立王国であったが、実質的にはアメリカ資本の砂糖産業を中心に動いており、政治・経済的主導権は少数のハオレ(haole=白人)が握っていた。即ち、ハワイ社会は上層のハオレと下層の非ハオレ(non-haole)によって形成されていた。

砂糖耕地労働者は英語を話す"luna"と呼ばれる監督の命令の内容を理解する必要があったし、種類の違った言語を話す様々な民族グループが同じグループで働くようになると、共通の意思伝達手段(lingua franca)が必要となった。そして、英語がこのlingua franca形成の主要素となって、ある種の間に合わせ的言語(makeshift language)が出来あがった。これがHawaiian plantation pidgin Englishと呼ばれるものである。

プランテーション状態においては、言語のピジン化が深まり、移住者の子供達（二世）がにとってその言語が母語になるという、ピジンの母語化（creolization)が起こるのが普通である。しかし、ハワイは典型的なプランテーション地域ではなかった。耕地労働者

は通常3年契約、あるいは契約移民禁止後は自由移民という形で働いた。だから地理的、社会的移動が可能で、白人居住者との接触を増加させることも出来た。また子供をアメリカニズムと標準英語習得を強調する公立学校へ送ったり、経済的事情が許せば、白人子弟が多い私立学校へ送ることも可能であった。その結果、Hawaiian Creole Englishは常に標準英語に近づき、脱クレオール化(decreolization)が起こってきた。

ハワイでは、1896年に義務教育制度と同時に全公私立学校の基本教授言語を英語とする学校法が実施され、6～14才まで(elementary 及びsecondary school)を強制就学年齢とし、これらの児童は公立学校、もしくは英語を使って公立学校と同等の科目を授け得る私立学校への通学が義務付けられた。米布併合後の11年間(1900～1910)に、公・私立学校の生徒数は15,537人から26,122人に増加した。この内日系人生徒数は1,352人から7,607人に増え、全生徒数の30%近くを占めた。当時、白人系生徒の大部分が私立学校へ行き、人数的には少ないが、ハワイ系生徒の多くもKamehameha Schoolというハワイ系子弟のみを収容した私立学校へ行った。しかし、東洋系移民の子弟の殆どは公立学校へ入学した。従って、ハワイの教育システムは、白人の私立学校、東洋系の公立学校というハワイ社会の二重構造に添って機能したのである。

ハワイの学校制度の最も重要な目的の一つは、ハワイの共通語であるべき英語の普及振興につとめ、英語習得こそがハワイに於ける社会的向上の最も基本的な手段の一つであることを教えることであった。しかし、1919年の公私立学校の生徒数の内、僅か2,400人が英語を母語としたが、この内1,500人が私立学校に在籍し、残りの僅か900人が公立学校に通い、約36,000人の公立学校生徒の中に散らばっているだけであった。この結果、公立学校では、英語を母語とする生徒が他の生徒の英語に良い影響を与えることは出来ず、逆に、英語を母語とする生徒が英語を母語とせず、ピジンを話す他の生徒に数で圧倒されて、彼らの英語が損なわれてしまう恐れの方が遙に大きかった。

1917年、アメリカが第1次世界大戦に参戦し、翌年に軍隊が凱旋してくると全米に熱狂的な愛国運動が起こった。この運動は"one nation, one flag, one language"をスローガンに、アメリカに対する強い愛国心を強調した。こうした風潮の中で、1920年2月に日本人とフィリッピン労働者、13,393人による第2次オアフ島ストライキが起こった。当時、ハワイの日本人人口は109,274人でハワイ総人口の47.7%を占め、しかも都市と地方との一体的協力と連携による社会意識を一つにした日本人社会を形成していた。

人口の半分近くがアメリカに対する忠誠心を疑問視される日系人占められ、しかも労働組合を組織し、大規模なストライキを敢行して、次第に白人支配体制に挑戦的になってくると、公立学校は将来大きな投票力をもつ東洋系子弟を早急に米化する為の教育機関としての役割を果たすべく要求されるようになった。また、第1次世界大戦後、多くの軍人や民間人がアメリカ本土より来布し、ハワイに初めて白人中産階級が出現した。これらの白人達は自分の子供を私立学校へ通わせる経済的余裕はなく、公立学校へ送らざるを得なかった。そこで、ハワイの公立学校は非白人生徒の米化教育に加えて、白人中産階級子弟の言語、伝統を擁護するという全く新しい任務をも帯びるようになった。その結果、普通公立学校とは別に、標準英語を話す生徒の為に、標準英語学校(English Standard Schools)が9校設立され、人口の少ない地域では、同じ公立学校の建物の中にEnglish standard gradesが作られた。

普通公立学校では、ハワイに招かれたJohn DeweyやFrancis Parkerなどの社会・市民研究に重きを置いた進歩主義的教育哲学が継承され、非白人生徒に標準英語とアメリカの伝統的思想、特に民主主義の原理が徹底的に教えられた。即ち、"real Americans"養成の教育がされた。公立学校の米化教育による標準英語奨励の結果、二世の英語は次第に均一化し、英語を母語とする者が聞いても、語法、発音に関してacceptableなものになりつつあった。しかし、同時に米化教育によってアメリカの伝統的思想を学びにつれて、二世はハワイ社会の白人に少数独占支配と言う最もアメリカ的でない部分に幻滅を感じ、自分達の劣等な立場に不満を持つようになってきた。その結果、標準英語は白人少数支配者のシンボルと考え、英語標準学校を"prestigious schools"と見なし、英語の話し言葉が人種的、社会的差異を明確化するものと考えた。即ち、標準英語が上・中層階級の白人住民の言葉であるなら、非白人が白人の様に話すことは白人の経済、社会的優位を共有し、学校が唱える"real Americans"の状態に近づくことを意味する筈であった。しかし、民主的アメリカとは対照的なハワイ社会で、非白人が白人と同等に受け入れられるチャンスは皆無であった。一方、標準英語を話すことはhaolefied(白人化)することであり、これは彼らが属する社会階層や人種グループから自分自身を離すことを意味した。こうした社会的矛盾の反発として、彼らは白人との間にある相違点を強調し、彼等自身の存在を誇示しょうとした。その一つの方法が、彼らのスピーチ・パターンに現れた。彼らは英語標準学校の設立を契機に、より好ましいと提示された標準英語を拒否し、ピジン英語の特異性を故意に顕示するようになった。そして、英語標準学校に通う極く少数の日系や他の東洋系の生徒達を、標準英語の為にピジン英語を捨てた"sissy"で"haolefied (白人化した)"な人間として非難した。この結果、他の二世も仲間からのプレッシャー(peer group pressure)を避ける為に、意識的に標準英語を避け、ピジン英語を話し、英語標準学校の入学を避けようとした。この傾向は特に男子に強く見られた。女子の場合は、この様な妨害も少なく、教育熱心な親の期待に答えようと懸命に勉強した為、標準英語の習得度も高く、英語標準学校への入学率も男子より高かった。これは、一般的に女性の方が標準語(overt prestigeの有る形式)を好み、男子は非標準語(covert prestigeのある形式)を好むという社会言語学の通説に一致する。

Ⅲ. 真珠湾攻撃が日系人英語コミュニケーションに与えた影響

1. ハワイにおける言語米化

日本軍の真珠湾攻撃によって、日系人のハワイに於ける社会的立場は最悪のものとなった。敵である日本人と同じ顔をし、同じ言語を話すことは、必然的に疑惑や警戒を招き、結果として、日系人は文化的抑圧を受けることとなった。これに対して、敵性外国人となった一世は、日本や日本文化との繋がりを否定してアメリカ的なものを取り入れることによって、またアメリカ市民である二世はアメリカ合衆国に対する強い愛国心(super patriotism)を示すことによって、彼らに向けられた疑惑や誤解を取り除こうとした。

戦前の日系人の社会的行動を決定してきた日本人社会の指導者の抑留や日本語学校や日本語報道機関等の日系人組織の解体によって、日系人はそれまで日本語と日本文化を享受し、日本との繋がりを確認することの出来た精神的拠り所を喪失した。それを埋めたのが日系人常時奉仕委員会であった。この委員会は1942年2月8日に組織され、軍当局と日系

人住民とのパイプ役を演じた。その主目的の一つは、ハワイの日本人と日系米人がアメリカへの忠誠心を強化する為の教育プログラムの実施であり、言語米化が年齢的に余り期待出来ない一世よりも、二世が反アメリカ的なピジン英語や日本語と英語の混成語を完全に止め、標準英語を使う様に呼び掛けた。

ハワイ公教育局もピジン英語を“an evil outcast of language”と呼び、公立学校における英語教育の改善、即ち、ピジン英語の一掃と標準英語の普及を急いだ。この結果、公立学校では戦争中を通じて“Speak American”運動が活発に行われ、“Speak American!” daysを設けたり、“Speak American” essay contestsが行われたりした。生徒側も生徒会のスローガンを“Speak American”として、運動を全面的に支持した。公立学校に於ける“Speak American”運動に最も積極的に参加したのは、日系生徒達であった。軍隊に志願するにはまだ若すぎた彼らは、アメリカに対する強い愛国心と忠誠を証明する一つの方法として、この運動に参加し、コンテストで優秀な成績を修めた。日系人非常時奉仕委員会も積極的に“Speak American” essay contestsを主催した。例えば、マウイ非常時奉仕委員会主催によるコンテストの小学生の部で一位になった日系女生徒は、“Why Speak American”と題するエッセイの中で次の様に語った。

> Let us all, as young patiriotic Americans, regardless of our races, strive to work, act, think and speak American, the language of America. Speak American to despel fear, suspicion, and misunderstanding.[1)]

2. 442連隊兵士のアイデンティティーとコミュニケーション

真珠湾後、ハワイ国防軍(Hawaiian National Guard)に属していた日系人兵士は各自の部隊から離され、ハワイ緊急部隊が作られ、この部隊を土台に約1,400人のハワイ日系人だけの第100歩兵部隊(the 100th Infantry Battalion) が編成された。更に、1943年2月に、志願兵による第442戦闘部隊(the 442nd Regimental Combat Team)が、ハワイからの最終人員、将校25人、兵士2,855人と米本土からの1,200人によって編成された。彼らはミシシッピー州のCamp Shelbyで訓練を受けた後、100大隊と合流し、ヨーロッパ戦線で輝かしい戦歴を残した。

ハワイと本土の二世は、1942年にCamp Shelbyで初めて顔を合わせた。これら二つのグループは、①肉体的特徴、②日本移民の子供、③アメリカ市民として完全に平等な権利を獲得する為に入隊した、という共通点は有ったものの、①熱意の差、②言語の差という相違点があった。ハワイ二世の方が本土二世より志願状況や訓練の成績においても、遙に優れていたにも関わらず、下士官の地位の殆どが本土二世によって占められてしまった。この最大の理由は、本土二世が標準英語を離せたが、ハワイ二世の多くはピジン英語を話し、白人上官と旨く意思が出来なかったことである。ただ正確に英語が話せないという理由で不当に評価されたことで、ハワイ二世は本土二世への対抗意識を燃え上がらせ、訓練や戦闘において大奮闘した。同時に、ハワイ二世としてのアイデンティティーを表面化し、本土二世でないことを示す為に、ハワイのシンボルとしてのピジン英語を強調するようになった。この結果、言語的差異が442連隊の2つのグループ間の人間関係を困難なものにし、戦闘部隊としての存在意義をも否定しかねない大問題となった。

本土二世兵士は、ハワイ英語に対して“uneducated,” “funny,” “like a foreign

language," "difficult to understand"と感じ、ハワイ二世兵士に対して"conceit"と"superiority"を感じていた。ハワイ二世兵士の本土二世兵士のこの態度に対する反応は、"Hawaii kids didn't like the mainland kids. The basic reason for this was because thley talked differently."というものであった。ハワイ二世にとってピジン英語はfriendshipを高めるpeer languageとして重要なpersonal makeupの一部であった。従って、日系人が他の日系人にハオレの様に話すことなど、ハワイでは考えられないことであった。彼らにとって、標準英語を話すことは、"I'm better than you are"という優越感の表れであった。従って、それに対する彼らの反応は、"So, you think you're so much better. Well, you go your way, and I'll go mine"という拒絶的なものとなり、標準英語を話す本土二世兵士は白人化した、気取った、嫌な奴と見なしたのである。[2)]

この様な二つのグループ間のlanguage attitude barrierはCamp Shelbyでの訓練の間続いた。しかし、訓練が終わり、戦闘が始まるにつれて、このbarrierは次第に克服されていった。一緒に過ごす間に共通項が増え、不一致が減少し、彼らの間の障害や摩擦が緩和されてきたのである。442連隊を一つのグループとしてまとめた最も重要な共通項は、共通言語の発達であった。ハワイ二世だけで構成された、百戦錬磨の100大隊の合流もあって、ハワイ二世が数の上でも、戦闘能力の上でも本土二世を遙に圧倒した。その結果、二つのグループの間のコミュニケーション障害を少なくする為に、大部分の本土二世兵士は言語的妥協を示し、ハワイ二世兵士が話すnon-standard dialectに合わせようと努力した。そして、終戦直前には442連隊の50%位の兵士が本土二世となったが、連隊の主流言語、あるいは共通語はピジン英語となり、the language of the groupとして、連隊のgroup identyを表すものとなった。

部隊のidentificationとして使われた表現に"One puka puka"が有る。この表現は1942年6月頃から100大隊の兵士達によって使い始められた。"puka"はハワイ語で「穴」のことを意味し、ここから「0」を示すようになった。従って、"One puka puka"は"One zero zero (100)"を意味する。"One puka puka"は、例えば、戦闘中に大隊からはぐれてしまった時などに、自分自身の所属を確認(identify)する為に使われた。

"Go for Broke"は442連隊で、"Shoot the works"や"Give all you've got"という意味に使われた。"Go for broke"は、連隊のスローガンとして指揮官の部屋の壁にも飾られたし、同時に、Harry H. Harada作詩・作曲の連隊歌のタイトルにもなった。この連隊歌の中にはピジン英語やハワイ語が多く使われたが、ハワイ二世兵士だけでなく、本土二世兵士も、白人将校も好んで歌った。

442連隊のハワイ兵士達は、仲間や車両に典型的なハワイ方言で名前やニックネームを付け、本土出身者もこれを受け入れた。例えば、"Bollohead (bold head)," "Cha ka laka (an old car)," "Chop chop (hurry)," "Da kine (that kind)"などピジン英語や"Happa (half)," "Pupule (crazy)"などハワイ語が含まれていた。[3)]こうした名前やニックネームは連隊の兵士の言語の多くの部分を占め、group cohesivenessに大いに貢献した。

この様に、本土の二世もハワイ二世もfull-fledged Americansになる為に軍隊に志願した。即ち、どちらのグループもアメリカ市民としてのアイデンティティーは非常に強かった。しかし、同時に彼らは442連隊の一員としてのアイデンティティーを持つ必要もあった。ハワイからの兵士が人数からも士気からも本土兵士を上回ったことから、本土兵士が

ハワイ兵士に妥協し、同化して、全員がアメリカ人としてのアイデンティティーを持ちながらも、ハワイ英語が連隊のgroup identityを表出させるものとなったのである。

Ⅲ. 戦後の日系人と英語

戦争中の日系将兵の輝かしい戦歴と戦後の政治・経済機構の変化により、白人勢力の低下と日系二世の進出によって、次第にピジン英語に対して寛容な風潮が見られる様になってきた。こうした状況に真っ向から反対したのは、442連隊の帰還兵達であった。442連隊の一員として100%の米化に努力し、血で以てアメリカへのアイデンティティーを証明した彼らは、ハワイに帰還し、日系人が言語的非アメリカへの方向を進みつつあるのを見て、今度は442連隊の一員としてより、アメリカ市民としてのアイデンティティーを表出させたのである。彼らは、新しい世界に生きる二世にとって、ピジン英語は一致団結して立ち向かわなければならない敵以外の何物でもない、と訴えた。

こうした日系人のピジン英語に反対して、アメリカ人としてのアイデンティティーを表面に出す傾向は、1959年のハワイ立州まで続いた。

Ⅳ. 結論

人は帰属したいと願っている集団に自分自身を近づける為にコミュニケーション・システムを作り出す。戦前の二世の様に、志向するグループに入ることが不可能であると判断し、挫折したり、あるいは、戦争中のハワイ日系兵士の様に自分の属しているグループから離脱する必要がない、または、離脱しない方が有利だと判断した場合、志向するグループよりも自分の属しているグループの成員としてのアイデンティティーを表出させ、コミュニケーション・スタイルもそれに合わせることも有り得る。逆に、戦争中に"Speak American"運動に従事した若い二世グループや復員した日系将兵の様に、志向するグループの一員としてのアイデンティティーを強く望み、同時にどうしてもその希望を叶えなければならないと感じる場合、そのシンボルとしてのコミュニケーション・スタイルも当然、志向グループのものへと向かうのである。

この様に、ハワイの日系人の言語はピジン英語から標準英語へと必ずしもスムーズに進んだ訳ではなく、ハワイにおける彼らの社会・経済的地位や日本とハワイやアメリカ合衆国との関係等が彼らのアイデンティティーに影響し、それがアイデンティティーのシンボルとしてのコミュニケーション・スタイルに影響を与え、時には急速に標準英語に近づき、時にはピジン英語へと逆行するという、pendulum現象を示すことが往々にしてあったのである。

注

1) Lena Watanabe. "Why Speak American," *Hawaii Educational Review*, XXXI, (May, 1943), p. 284.

2) Patricia T. Matsumoto. "The Hawaiian Dialect of English: An Aspect of Communication during the Second World War," an unpublished M.A. thesis in speech, University of Hawaii, 1966, pp. 94-95.

3) *Ibid.*, pp. 119-121.